会員増強委員会だより

第 9 回 aaca サロン開催報告
美術・工芸とともに建築空間を構築する
再読と継承　東京藝術大学大学美術館

(株)日本設計
執行役員フェロー
博士(学術)
日本建築美術工芸協会法人会員
古賀大

21 世紀に入り四半世紀を迎えようとしている今、近代の所産から人間が得た物事は何だったのか、改めて考えることが多いと思います。あらゆる産業で効率性は飛躍的に向上し、多くの物とサービスが行きわたり、建築や都市は再生産を繰り返してきました。しかし、この数年を振り返ると、経済的な低成長を嘆きながらも、その緩やかな歩みの中で、人間本来の感性を大切にする時間を取り戻しつつあるようにも見えます。

私が六角鬼丈先生にお会いしたのは、1995 年に東京藝術大学大学美術館の設計チームに入った際で、完成までの約 4 年間をご一緒する機会に恵まれました。その空間と光、意匠と素材は鬼丈先生の思想が強く打ち出されたもので、国宝・重要文化財を収蔵する美術館にふさわしい表現として、赤砂岩、アルミ鋳物、銅板、産業用ガラスインゴット、仕上用木材などの多様なマテリアルの他、青磁タイル、漆、螺鈿、乾漆板などの素材と技によりつくられています。

今回お招きした建築家の六角美瑠さんは鬼丈先生の次女であり、現在は神奈川大学教授を務めておられます。大学では鬼丈先生の作品の造形・空間の意味を分析しながら現代デザインを考える授業もされています。第 9 回 aaca サロンでは、六角美瑠さんの仕事、建築思想をお聞きするとともに、東京藝術大学大学美術館などの作品を手掛かりに建築と美術と工芸の関わりを考える機会になりました。

まず、自己紹介では鬼丈先生の初期作品である自邸「クレバス」で育ったことから始まり、これが建築の原風景になっているとのことでした。父の影響を受けつつも、建築思想、空間への関心として「景と建築」というテーマを見出されたお話を聞きました。

「工芸と建築」は六角家にとってたいへん繋がりの深いものと言ってもいいでしょう。明治から昭和にかけて活躍された漆芸家である紫水先生、大壌先生、建築家の鬼丈先生と四代にわたる創作の系譜があります。「偶然はなく、工程プロセスを考えないと作品にならない。そういう面で工芸と建築は似ている。」との考えを示され、ものづくりの心が二つの領域を超えて確かに継承されていることに気づかされます。また、生活造形の多くに「用と美」が求められるものですが、ここに「技」が加わることで初めて「作品」になる、建築が「建築作品」になるという見解をお聞きして、眼が覚める思いがしました。そして、鬼丈建築の「用と美と技」を支えるのが手と感性であり、素材の技と巧を極めることで東京藝術大学大学美術館に結実したと美瑠さんは再読されています。

大変興味深くお聞きしたのが、鬼丈先生デザインの「伝家の宝塔」という厨子のようなタワーが六角家にはあり、その家系に伝わる過去・現在・未来の時間が空間的に積層する装置として大切にされていることです。このアイデアは家族を超えて、感覚ミュージアムのある岩出山町の地域住民の記憶の装置として「千の小箱」に形を変えて、地域のコミュニティを保つことにも役立てられています。

お話の最後に「再読から継承へ」として、鬼丈先生の遺した光恩寺弁天堂（不忍池）のプロジェクトを美瑠さんが引継ぎ、現代の木造の先端技術を用いて美しい構造空間にチャレンジをしていることが紹介されました。その空間を実体験できる日が楽しみです。

六角鬼丈先生の作品は、達筆のスケッチや素材とマテリアルの技巧を尽くした強い形象に眼を奪われます。しかし、今回、作品を丹念に再読し、人間の心と技、精神性と身体性とを切り離すことのない現代建築を深く追求してきたことや、自然の景から導き出し一人ひとりの心に思いを寄せる創作の内面を、参加された皆さんにも感じ取って頂けたように思います。

六角美瑠さんには大変興味深いお話をお聞かせいただき、参加された皆様とともに楽しい時間を過ごすことができました。深く御礼申し上げます。

サロン風景。日本設計本社移転後の最初のイベントとして共同開催。

上：六角美瑠さんの代表作 ORU
右：学生とともに製作した弁天堂モックアップ